

春の章

桜が本格的に咲き始めたその週の終わり、金沢港に大きな荷物が到着した。

晴れ渡った青空の下で、クレーンに釣り上げられたその荷物が、きらりと光る。

北陸新幹線用に製造された、W7系の第一編成だった。

陸揚げされた第一編成の先頭車の前に、大勢の人が詰めかけていた。

報道陣、来賓のお偉方、JRの社員、地元の幼稚園や保育園の子ども達、楽隊、そして少し離れた場所には、一般の人達。

皆、北陸新幹線の車両を見に来たのだ。誰も彼もが嬉々とした表情で、車両を見ている。その熱気たるや、吹き付ける冷たい海風などものともしない。

はくたかとは同僚となる「かがやき」と「つるぎ」と共に、その熱気の中にいた。

「どうした、緊張しているのか？」

口を横一文字に閉じているはくたかに、かがやきが耳打ちした。

「いえ、そういうわけでは」

と言いはしたが、実際には緊張していた。これから行われる式典で、自分が何かをするわけではないが、昔からこういつた場は苦手だ。

「ならもう少し、にこやかに微笑んではどうかな。折角の祝いの場なのだから」

「それは俺ではなく、つるぎに言つてやつて下さい」

かがやきを挟んでくたかと反対側に立つつるぎは、可哀想な位にガチガチになっていた。やれやれとため息を吐いたかがやきは、つるぎに何かを耳打ちした。そのお陰か、少しだけ表情が緩んだ気がしたが、それでも緊張しているのは誰の目から見ても明らかだった。

目の前では石川県知事を筆頭にした来賓の挨拶が続いている。この後は音楽の演奏と共に、子ども達が持っている風船を空に放つて式典が終わる予定だ。晴れていても冷たい海風に晒されたままでは、風邪を引いてしまいうさだ。

来賓の挨拶が終わると、楽隊が演奏を始めた。爽やかな曲調の行進曲に合わせて、子ども達が前に進み出る。「それでは、じょうぞー」という進行役の合図に合わせて、手に持った風船が放たれた。

拍手とファンファーレが鳴り響く。

色とりどりの風船は空いっぱい広がり、風に乘つて高く高く舞い上がっていった。その様子を地上から眺めながら、なんだか夢を見ているようだ、はくたかは思った。

去年の秋に、北陸新幹線の列車に選ばれてから早数ヶ月。厳しい冬を乗り越え、ようやく春めてきた北陸にやってきた、北陸新幹線の車両。これから十二月までの間に、十編成の車両が金沢港にやってくる。それが揃う頃には、線路の工事が終わり、試運転が始まっているだろう。

開業は来年三月の予定だ。つまり、来年の今頃には、営業運転が始まっているということになる。つまり、特急としての自分に残された時間は一年を切っている、と気付いた途端、複雑な思いが胸を過ぎった。

白山車両基地に戻るといふかがやき達と別れ、一人で金沢駅にある休憩室に戻った。はくたかを迎えてくれたのは、慣れ親しんだ特急の同僚達だった。

「おつ、おかえり、はくたか！」

「式典お疲れ様。テレビで見えていたよ。すごい人出だったね」

「たね」

サンダーボードとしらさぎが、はくたかの方を向いてそう言った。そんな二人の顔を見て、はくたかは張り詰めていた緊張の糸がゆつくりと緩んでいくのを感じた。

「ありがとう。何とか無事に終わったよ」
全身をほぐすように、軽く肩を回しながら、ソファア

に腰掛ける。
「いよいよだね。そのうちに試験走行も始まるんでしよう？」

はい、としらさぎがお茶の入ったカップを差し出してくれた。海風に晒されて冷たくなった手に、カップのぬくもりが染み入って、ゆつくりと強ばりを溶かしてくれ

る。
「うん、今回到着した車両が一編成分揃えば、まずは基地の構内で試験をするんだって」

「本線はいつ走るんだ？」

サンダーボードははくたかの隣に座ると、そう尋ねた。

「まだ全部の工事が終わったわけじゃないから、それが全て終わってからだと思う。うーん、夏頃かなあ」

「そうか、まだ工事が終わってなかったんだな。下から見てる分には、もう出来てるように見えるんだけどな」

サンダーボードの言うように、在来線の線路から見ている分にはいつでも走れるくらいに完成して見えてい

た。だが、まだ一部区間でレールや架線の敷設が残っていると聞いていた。

「でも、試験走行が始まったら、はくたかもますます忙しくなるね」

ふう、としらさぎがため息を吐く。

「そ、そうだよな……」

複雑な表情のサンダーバードに、そうなんだよね、とはくたかと言った。

「忙しいのは構わないけど、どっちつかずになるのは嫌なんだ。今後のことを考えたら新幹線の仕事を優先するべきだけど、本当にそれでいいのか分からなくて……」

「でもさ、新幹線はあと二人いるけど、特急はくたかは、はくたかだけなんだぜ？」

サンダーバードの意見に、しらさぎも頷いた。

「そうだね、はくたかははくたかにしか出来ない事をやるべきだよ。それにそろそろ、ゴールデンウィークに備えていかなくちやならないし」

「臨時列車もあるしな！」

「そうだね。気を引き締めていかないと！」

サンダーバードとしらさぎの言葉に、はくたかははつとした。自分にしか出来ない事は何だろうと考えた時、思い至るのは特急としての自分だ。だが、本当にそれを優先しても良いのか、判断しかねていた。

それから一週間ほどして、はくたかの元に、北陸新幹線のレール敷設が完了したという知らせが届いた。

「来月の二十四日にレール締結式を富山駅で行うから、出席するように」

上司から渡された書類には、当日の予定等が書かれている。それに目を通し終え、午前中で終わりそうだと思っただはくたかは、僅かに安堵のため息を漏らした。

それを聞き捨てなかつた上司が、くすりと笑い声をこぼした。

「どうかしましたか？」

「いや、明らかに『午前中で終わりそうで良かった』という顔をしていたからな」

心の内を言い当てられ、恥ずかしさの余りカツと頬が熱くなる。

「す、すみません。決して仕事が辛いとか、そういうわけでは」

「いや、構わないさ。二足のわらじは大変だろう」

「はい……休みが欲しいわけではなくて、その、気持ちの切り替えが上手く出来なくて、中途半端になりそうなのが……」

「そうだな。新幹線の事を考えながら、今まで通り特急としての仕事をする。なかなか出来る事じゃない」

その時上司が、そうだと手を叩いた。

「ときやあさまに聞いてみるといい。彼らは元々特急上がりだっただろう。はくたかと同じ経験をしているはずだ」

言われて、確かにそうか、と思った。だが、ときは新潟発着であり、越後湯沢という途中駅で捕まえるのはなかなか難しい。かといつてあさまは長野まで行かねばえず、これまた会うのは至難の業だ。

この先北陸新幹線の試験運転が始まれば、長野や東京へ行く機会が増えるだろうから、その時に話をしてみるのがよいだろうか。

「……そうですね。でも、お二人ともお忙しいと思うので、あまり手間を掛けるのは申し訳ないのですが……」

「何を言う。来年には同僚になるんだぞ。遠慮していてどうするんだ」

上司が言うことも一理あるのだが、いかんせん長年雲の上の存在だと思ってきた新幹線達に、気安く話しかけられるほど、気持ちの整理がついていなかった。

はくたかの曖昧な返事に、上司も最後には、まあ無理強いはいしなないがな、とため息混じりに言った。

上司の執務室を辞したはくたかは、廊下を歩きながら窓の外を見た。ここから見える景色は、ここ数年で劇的に変わった。金沢駅周辺は新幹線開業に伴う建設ラッ

シュで、バスロータリーや駐車場が整備され、その向こうにはビルがいくつも新しく造られている。

金沢駅も工事の真つ最中だ。新幹線ホームは形こそ出てきているが、内装はまだ完成にはほど遠い。

これが来年三月には全て完成し、北陸新幹線が営業運転を始めているはずなのだが、今だその姿を想像することが出来ずにいた。

かがやきやつるぎは、来るべき日を意識して行動している。だが、本当に自分は新幹線になりたかったのだろうか。時折、そのような疑問が浮かぶほどに、はくたかは迷っていた。

「はくたか」

越後湯沢駅の改札前のコンビニで昼食を物色していると、上越新幹線の列車であるときに声を掛けられた。驚いて手に持っていたおにぎりを取り落としそうになったが、間一髪で受け止め、レジに差し出す。

ときに声を掛けられるのはいつも突然だ。

「と、ときさん。今日はこちらにいらっしやっただす

か」

ときは菓子パンを二つと缶コーヒーを隣のレジに差し出した。

「どうだ、準備は順調か？」

「あ、はい……」

どう答えたらいいのか分からずに口ごもってしまふ。

すると、ときは改めてはくたかの方を見た。そして、良かったら一緒に食べないかと言う。

「時間が大丈夫なら、今日は天気が良いからあの高台で食べよう」

レジの人からおむすびとお茶の入った袋を受け取りながら、はくたかは頷いた。先に歩き始めたときに続いて駅を出ると、高台に続く小道を上っていく。辺りには多くの雪が残っていたが、他にここを通る人がいるのか、その小道は歩きやすいよう雪が退けてあった。

たどり着いた先は、山の中腹にある、展望用のスペースだった。はくたかとはときはいくつか置かれているベンチのうち、日当たりの良いベンチに並んで腰掛け、越後湯沢の街並みを眺めながら、それぞれが買った昼食を口に運んだ。

見回す街並みはまだ白いが、ここは太陽の光のお陰で暖かい。

昼食を食べ終えて一息吐いた時、はくたかがぼつりと

呟いた。

「そういえば、北陸新幹線になれるかもしれないと、ときさんに言われたのも、ここでした」

その言葉を聞いて、ときは頷いた。

「もうずいぶんと前の事のように思えるな」

「三年ほど前だったと思います。本当に、あれから今日までの時間は、あつという間でした」

北陸新幹線開業後の特急はくたか廃止報道にショックを受けた日、ときに連れられて初めてここへ来た。そして、はくたかが北陸新幹線の列車になれる可能性がある事を告げられた。

それから、北陸新幹線の列車に選んでもらえるよう、研修に参加し、試験を受け、そして地域の人々の応援もあつて、一般公募で得票数一位になった。

その結果、去年の十月に、新幹線の列車となる事が決まった。速達タイプではなかったが、各駅停車タイプの列車として、はくたかは選ばれたのだ。

まだまだ列車として走りたい。走ってみたいと願つて、新幹線の列車となることを選んだ。だが、ここに来て迷いが生じている。新幹線の列車となることに期待がある一方で、特急としての命は一年を切っている。未来に備えるか、今の役割を大切にするか。どちらに重きを置くべきなのか、はくたかは悩んでいた。

その時、上司に言われた事を思い出した。ときやあさまははくたかと同じ、特急から新幹線の列車になったのだ、と。

ときやあさまの手を煩わせたくないと思っていたが、運良くこうしてときから声を掛けてもらい、話をする機会が持てた。折角だから訊いてみよう、はくたかはずっと手を握りしめる。

「あの、こんな事を訊いては、怒られてしまうかもしれませんか……」

「何だ？」

「ときさんも、特急から新幹線になったんですよね。その、選ばれてから、実際に新幹線になるまでは、どんな風に過ごしていたか、覚えていますか？」

はくたかの問いに、ときは何かを察したようだった。ふむ、と考え込むような仕草を見せ、しばし黙る。

「うむ……私の時はどうだったか……」

「あ、あの、差し支えなければ、覚えている範囲で構わないのですが……」

しどろもどろになるはくたかに、いや別に構わないが、と前置きして、ときは口を開いた。

「そうだな……私の時も自分の他に、速達タイプに選ばれたあさひがいた。彼は一度引退した身だったから、開業に関する準備はあさひに任せて、開業直前まで特急の

仕事ばかりしていたような記憶があるな。それでも走行試験などの最低限の仕事はしていたから、普段よりは忙しくしていたと思う」

それと、とときが付け加えた。

「負い目も感じていた」

「負い目？」

「前にも話したと思うが……上越新幹線の開業に伴い、君の先代を含めた多くの特急が廃止になることが決まった中で、私だけが新幹線として走り続ける事になった。他の特急達に何か言われることは無かったが、自分が選ばれなければ他の誰かが走り続けられたのではと思うと、どうしてもな……」

その時のときの気持ちだが、はくたかにも分かった。はくたかの場合には北越が廃止となる。自分だけが残って北越が廃止になることに、多少なりとも後ろめたない気持ちがあった。

だが、と言葉を切ったときの目には、強い光が宿っていた。

「一度決まってしまったことを覆すことは出来ないし、選んでくれた人の意を無にすることも出来ない。結局は、割り切るしかないのだ。その代わり、廃止になる特急達の事は、決して忘れないと決めた。彼らの思いを背負って、自分は新幹線になるのだと、自分に言い聞かせ